

氷見線に乗らむと待てばドラエモン列車入り来て鮮
やぐホーム 岡田恵美子

一読、夢の中の場面のようにもあるが、氷見線には現実に「ドラエモン列車」が走っている。夢の中に入り込んだというよりも、夢の一部が現実に出出してあつげにとられてる感じが。

病院は折しも梨の花ざかり死者はひっそり裏口を出る 森本壽々子

死者が病院を出る場面を、感情を押さえてたんだんと表現して印象的である。私も、昨年、梅の花が咲く頃、母の遺体といっしょに病院の裏口をひっそりと出た。

鳥海山の雪嶺はるか望月の出羽一国を照らして高し 加賀谷実

大きな景色を、あくまでも大きくゆったりと歌った一首。近代短歌が追求した叙景歌。多くのすぐれた歌人たちが築き上げた叙景歌という財産を、みごとに自分のものにしてる。

あたらしき名の頭れてまた消えて「心の花」を過ぎし人々 田中薫

図書館で「心の花」バックナンパーを閲覧する一連中の一首。たしかに、何十年とつづく雑誌のバックナンパーを主体に見れば、一貫して続いてゆく雑誌の誌面上を人々が次々に通り過ぎて行くことになる。「頭れ」はあざやか、いちじるし、のニュアンスが強いので、ここでは「現れ」「あらはれ」の方がよい。

寂しさと切なさまだらに入り混じるガムテープには
小指の指紋 新留紀代美

引越し荷物をまとめているときの一連中の作。第三句で切れると読むべきである。「……まだらに入り混じるガムテープ」とつづいて読まれてしまうと、上句の比喩表現がガムテープにかかってしまい、なんともつまらない。一字空白を置くか、読点をつけるべきだったろう。

ガネーシヤの富貴な鼻を想わせる大きなナンが目の前 佐久間得幸

「ガネーシヤ」はヒンドゥー教の知恵と学問の神。頭部は象。鼻もちろん象である。インド・カレー屋で出てきたナンをうたった歌だが、意外な比喩が新鮮。

さらばじやと右手を上げて亡くなった大工の父は今も身の内 岩島千河子

映画か芝居の一場面のような父も臨終。「今も身の内」はやや舌足らずな表現だが、「今も身の内に（棲んでいる）」の意味だろう。作者の個人史の中の大切な一ページである。

雨の日の余白のように日は射せど濡れているなり菖蒲田の道 中西由起子

菖蒲園の道にしばらく日が射した、それだけの意味内容だが、こうして一首にしてあげてみると、一日の中の貴重な時間がそこにあるような感じがしてくる。第三句から第四句にわたる微妙な屈折感が、作者の視線と思いの波紋を伝えるからだろう。